

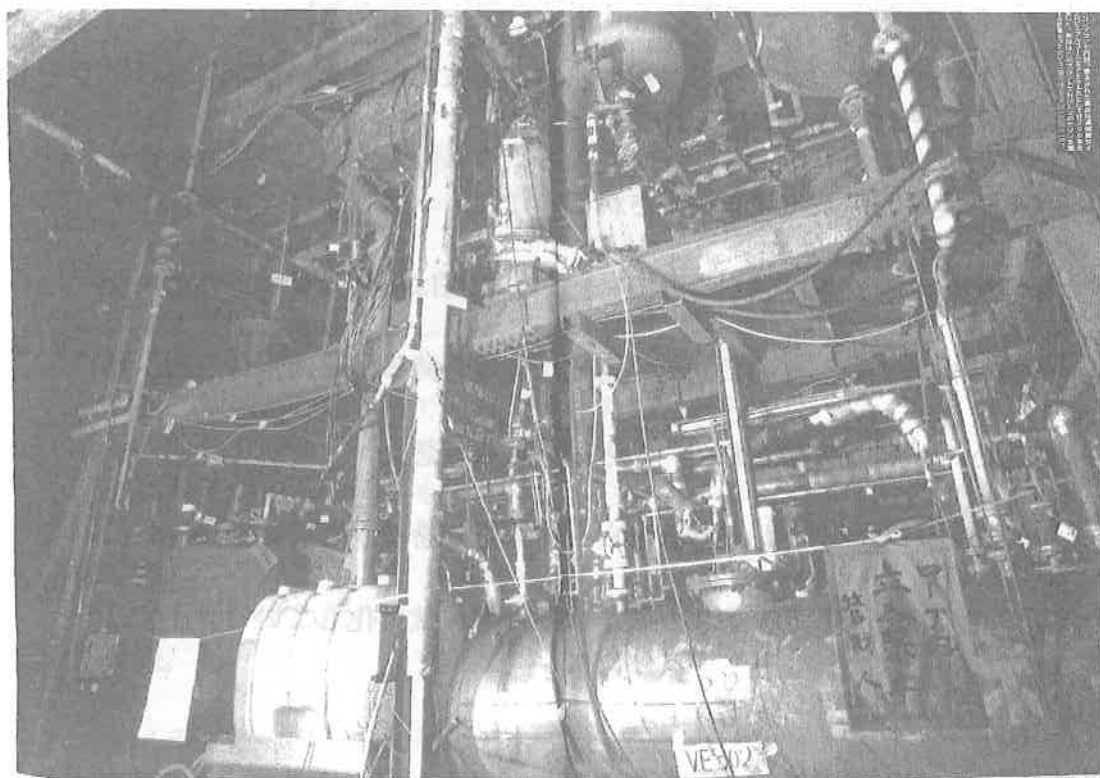
カナリヤの詩

CANTUS CANARIARUM

第 150 号

2007年 9月29日

- 2 P 手記「狂信 ブランチ・ダビディアン悲劇」 元サマナ
3 P 仮題「仏さんの慈悲」 ネット上にて元サマナ
4 P～ 原理派？のメールから 一杉浦兄弟、一応脱会？
6 P～ 大阪騒動ーその1 白龍さんブログの転載 A派の報告書
10 P～ 宮城刑務所だより「あたりまえの落とし穴について」 受刑者元サマナ
12 P 窓口から「蜘蛛の子が散っていく様子は一度だけ見たことがある」



第7サマナ 1998.9.16
P80

本号の写真は「場所ーオウムが棲んだ杜」 古賀義章
200. 3. 20発行 晩聲社 より
そのサイトは、<http://homepage1.nifty.com/yo-kogan/>

『狂信 ブランチ・ダビディアンの悲劇』

『狂信 ブランチ・ダビディアンの悲劇』
ティム・マディガン著 浅川寿子訳
徳間書店

を読みました。この本は1993年に出版された本です。

読んでみて、オウムとの共通点が多く、びっくりしました。アメリカなのでキリスト教系の団体ではありますが、仏教系とキリスト教系という違いを除いては、おどろくほど似ています。こういう例を知ると、オウムだけは真理で正しいんだと信者は思い込んでいますが、しょせんオウムもカルトの一つに過ぎないのだなあつくづく思います。

オウムとの共通点をざっと思いつくものをあげてみると、

- ・ ブランチ・ダビディアンの教祖は、口がうまく、教典の解釈をスラスラとしてみせ、信者はそれにひきつけられていた。
- ・ 信者は食事、睡眠時間を制限されていた。
- ・ 信者間のセックスは禁止されていたが、教祖は複数の愛人がいた。
- ・ 教祖は信者に対して独裁的で絶対的な権威を持っていた。
- ・ 外部から迫害、攻撃されているという被害妄想。
- ・ まもなくハルマゲドンがくるという終末思想をかかげていた。
- ・ 大量の武器を用意し、軍事訓練をするなど、武装化していた。

などがあげられると思います。

この本を読んで、オウムと同じような末路をたどったよその団体の事例を知ることができて、オウムや麻原さんのことを一步距離を置いて冷静に見られるようになりました。なんか、ふっきれたように感じます。ぜひとも、現役信者や脱会しても気持ちの整理がついてない元信者の人に読んでもらいたいと思いました。

元 サ マ ナ

仮題「仏さんの慈悲」

2チャンネルにあったある元サマナの書き込みです。参考までに。

616 : 神も仏も名無しさん : 2007/08/22(水) 21:56:22 ID:BTQMT5sI

>>608

あんまりここで詳しく書きたくないんだけど、脱会までの経緯ならいいよ。

サリン事件後、数ヶ月はサマナとして活動していました。

それから急性腸炎にかかって入院しました。

そこで家族と再会したわけですが全然心開けなくてね、

病気の方は余りにも状態が酷くて、

自然治癒するしか方法がありませんでした。

そんで半年くらいかな 腸閉塞ってのが度々あって、地獄のようでした。

痛み止めも打つたびにどんどん効かなくなってね、

で、また手術するしかないって時に、

痛み止めの影響もあったかもしれない、

一番お世話になった看護婦さんに、

ある言葉をかけられたんだ（忘れちゃったけど）

その看護婦さんの優しさになんか感動しちゃってね

オイオイ泣いちゃいましたw

凄く当たり前の優しさなのさ、自然でね。

本当の仏さんの慈悲ってこういうものなんだろうなって、

別になにか特別な事じゃなくて、

こういうさり気ない自然な事が仏さんの慈悲って奴なんだろうなって悟った。

しかも相手はただのオウム脳という凡夫、宗教的な事もなにもしてない凡夫。

オイラ今まで何してきたんだろう、

修行・教学とかいってオイラの心はカスカスの砂漠じゃん。

そのカスカスの砂漠に泉を湧かせてくれたのは、

その看護婦さんであり先生であり・・・

有難いね本当。

長くなったからもう止めとく。

杉浦兄弟——応は脱会？

で、そのメッセージが流れるという不思議な状態。
原理派メンバーに言いたいのかしらん。

以下、原理派のメールから。

もうじき脱会するカンカーレーヴァタ正悟師が脱会前にお別れの投稿をしてくれたのでお知らせします。

33)(1)自己の執着・他者への怒り K.Revata 07/07/11(水)17:49

自己を認識するという働きがある限り他者も同時に想定される

「自己」があることによって「他」が存在する

このように「自己」と「他」を別のものとしてとらえる働きによって自己の側には執着が、他者に対しては怒りが生じるのである

これは、ダルマキールティの『プラマーナ・ヴァールティカ』にある一節です。
わたしたちにとっては、初めて聞くような内容ではないため、ともすると「なるほど、その通りだね」と簡単に見過ごしてしまうかもしれません。

しかし、チベット仏教が繰り返し、菩提心を培うことの重要性を述べていることや、わたしたちの修行の最終の状態を「空と慈悲」、あるいは「慈悲と結びついた空性」といった表現をすることを思い出しながら、改めてこの一節を見てみると、そこには大変重要な教えが語られていることに気づきます。

ここでダルマキールティは、わたしたちが「怒り」という感情を起こすのは、その相手を「他者」と認識しているからだと言っています。

例えば、わたしたちが誰かと論争しているとしましょう。初めこそ冷静に論理的に意見を交わしていたのですが、次第に熱を帯び、ついには互いの性格的な欠点に言及するところまで発展し、とうとう怒りをぶつけ合うようになってしまふなどということはままあることです。

このようなとき、わたしたちの怒りは、「わたしと考えの違う他者」に対して生じています。ではもし、この相手を「自分」と認識したらどうなるでしょう。相手の人を「もう一人の自分」と思い込んだり、もしくは「相手の言っていることは自分のもう一つの見解なのだ」と考えるのです。試してみられたらいいですが、怒りが徐々に減っていきたり、あるいは全く感じなくなってしまうことがわかるでしょう。

これは大変興味深いことです。この例では、自分と違う意見を言ってきたのが「他者」であったため、自分の考えを譲ることができず、最後怒りという感情が生起してしまったわけですが、もし同じ内容を自分が心の中で思いついたとした

ら、そのことに怒りを持つ人はいないはずです。

「これはAだろう」「いや、Aはおかしい。Bではないか」と、心の中で自問自答するとしたら、いずれもが自分が思いついた見解ですから、そのどちらにも怒る人はいませんよね。

この違いがどこから来ているかといえば、「自己」と「他」という認識からなのです。

無智を根本とした愛着と邪悪心によって、わたしたちは苦しみ of 輪廻を繰り返しており、この相対的な感情を減することが修行の最終目的、煩惱破壊であることをわたしたちは知っていますが、この「愛着と邪悪心」を「自己と他」という関係と結びつけて考えることはあまり意識されてこなかったように思います。

ではもし、すべての対象を自分と認識できるようになったらどうなるのでしょうか。いえ、正確にはすべてが自分になってしまうのですから、他という概念を前提とした自分という言葉も適切ではありません。残念ながら、これを表す言葉はないようです。

そして、自己に愛着し他に怒るということからすると、すべての対象に愛着するということになります。しかし、愛着というのは偏った特定の対象に対する執着を指す言葉ですから、本当にすべての魂に愛着したとしたらそれは愛着と言えるでしょうか。当然、愛あるいは慈悲という言葉当てはめるのがふさわしいでしょう。ということは、執着と怒りといった相対的感情が少なくなればなるほど、「空と慈悲」に近づいていくことになります。(この考え方は、自我への執着を断ち切る、自我の放棄というものは逆の論理になるのかもしれませんが。あるいはその形を変えたものかもしれません。ここは難しいところですから、今後熟考してみたいと思っています)巷で流行りの歌でも、「みんな一人じゃない」とか「みんな一つ」という歌詞があるようです。仏教やヨーガではない、精神世界の書物でもそういう表現が出てくるらしいです。

やはり、人は「自己」と「他」を区別することが苦しみであって、その区別をなくしていくことが喜びなのだとすることを潜在的に知っているんじゃないでしょうか。

もともと「自」など、宇宙の一員として「他」とも、いや、無生物、岩石ともども、本質的には一体であること当たり前のことで、問題はその上で意識も利害得失も、個体としては別にしている容易でないこと、人間以外は何も言ってくれないことから、様々な紛議も悩みも自然環境の問題もある。

それが本質的には一体だと知ることだけで問題が解決すると考えるのは、上祐派と同じ間違いなんだが。

杉浦君らは、オウム真理教の大幹部であっただけで、説教をする資格がなぞないこと、まずは自分の力で食って行って罪滅ぼしをしていかなければ、何もいえるものではない、と言いたくなる、まあボチボチ。

(この3段分の文章は窓口滝本が記述)

大 阪 騒 動

以下、白龍さんのブログ 2007. 8. 9以降から転載

http://blog.goo.ne.jp/hakuryuu_001

3年前の、セイラさん言うところの、「大阪秋の陣」の報告書が、野田氏のブログに貼り付けてありましたので、こちらにも転載させていただきます。面白いのは、A派の内部に流れた報告書が出てきたこと。M派内部では、その時の状況報告書が、支部にも回ってきて、信徒も読むことが出来ました。それによって、大阪で、とんでもないことが行われていたのだということを知ることが出来たわけです。しかし、それはあくまでも、M派の側から見た現場の状況報告であって、A派側には、また違ったものの見方が存在するはずでした。それが今回の報告書で明らかになりました。

この報告書に書かれている状況説明が、正しいのかどうか、私が現場にいたわけではないので、なんとも言えませんが、デーヴィーさんの報告によると、池〇さんによる、意図的な策謀と上祐氏の強引なやり方が、事態を複雑にさせてしまったという捉え方をしているようです。まあ、A派側とすれば、正大師が、大家さんを抱き込んで、強引に名義変更にあつたまでは考えていなかったのだと思います。それが甘かったのですね。まんまとやられたという感じです。上祐氏のほうが上手だったということなのでしょう。それと、やはり、信徒の前で両者の話し合いをしましょうと言われた時に、サマンタバドラ師が逃げってしまったのは致命的でした。たしかに、上祐氏に、マシンガンのごとくまくしたてられれば、時々どもってしまうサマンタバドラ師では、討ち死にするのは火を見るより明らかではあります。しかし、それでもやはり逃げてはいけなかった。逃げた時点で、A派の負けは決定してしまったようなものです。そこは、踏ん張って、自分たちの主張を繰り広げるべきでした。

まあ、両者ともに、当時は、相当にエキサイトしていたために、ジェーンティー師の「けんかを売りに来たのですか！」発言や、上祐氏の「金玉付いてんのかよ！」発言が飛び出したのだらうと思いますが、どちらの発言も、信徒から見れば、立派な成就者方の発言とは、到底信じがたいものであります。

月日は流れ、ジェーンティー師も、今や教団を離れてしまい、「夏草や兵どもが夢の跡」になってしまいました。上祐氏も、3年前の、このような発言をした後から、大いに境地を高め、一元の思想に傾いていったわけで、当時のことを今更引っ張り出されても、そんな昔のことは、もう今の俺には関係ないと言われてしまうかもしれません。ですが、当時、今のような一元の思想を得ていたら、サマンタバドラ師にどのような言葉を投げかけたのか、私個人としては、非常に興味のあるところです。

【A派内部文書】2005年10月大阪道場分裂

外部には漏れないようご注意ください。

話し合いをすることになったと連絡してきました。そして、その話の中で、大家さん側の言い分が、契約の名義変更をする話でも連帯保証人を選ぶ話でもなく、その契約自体がすでに「無効」であるという話に変わっていったのです。

もともとこの大阪道場は、2003年5月頃に契約が結ばれたものです。しかし、ご存知のとおり、契約する前から「大黒柱」道場として内部への宣伝が行なわれていたこともあって、懸念された住民問題を二の次にして、入居・道場開きを強行したという経緯があります。そして、懸念されたとおり、道場開設直後から地元住民の猛烈な反発が生じ、大阪道場側だけでなく、大家さんやそのご家族に対しても、強い非難が集中しました。その結果、あまりの反対運動の激しさに大家さんが悲鳴を上げ、入居から2カ月も経たないうちに、早々に契約を解除して撤退する方向で教団側と大家さんとの話が一旦まとまったのでした。

しかし、当然のことながら、すぐに撤退しようにも引越し資金や代替物件は簡単には用意できません。退去の先行きについて不透明な状態のまま、大阪道場側では地元住民との交渉を重ねていました。すると、秋口に入ったころから、激しかった反対運動もやや落ち着きはじめ、また、大家さんとしても本音では契約を解除したくないという思いもあったため、反対運動の動向を注視しながらも、事実上、道場の使用を現状のまま継続することで大家さんと合意していたのでした（実際、10月10日に大家さんと池〇さん、サマンタバドラ師の3人が話し合った時点では、当初の契約が有効であることが前提になっていました）。

ところが、先ほど述べたとおり、10月14日、池〇さんを介してマイトレーヤ正大師と大家さんが連絡を取り合い、大阪道場での会談の段取りが進められていく中で、大家さん側の主張は、「契約は無効」というものになっていったのです。そして、それだけでなく大家さんは、契約を継続するための条件として、「もし大阪道場を維持したいのであれば、明日（土曜日）の勉強会に上祐さんを同席させ、信徒の前で討論会を開くこと。それを聞いた上で、今後の契約をどうするか決める」と言ってきたのでした。そこからあとは、マイトレーヤ正大師が、大家さんの意見を“代弁”するようなかたちを取りながら教団運営等に関する持論を述べ、大家さんの言うとおりの、自分を勉強会に参加させるよう、大阪道場側に要求してきたのです。

この時のマイトレーヤ正大師は、冷静に話し合うというよりも、一方的にまくし立てるように、集中的にサマンタバドラ師に強い言葉を向けられました。

「…他人よりも自分が苦しむ、これがボーディサットヴァじゃないのかよ。宗教的自己変革（※恐らく「改革」のこと）しなきゃいけなかったらそれで苦しめよ。そうじゃなかったら、選ばれた魂とか選民だとか言うな。事件はよくわからないって、変なこと言うな。人間としておかしいじゃないのかよ。魂あるのかよ！金玉付いてんのかよ！男かよ！おまえ、京都道場に來た学者上がりだったよな。15年前思い出してみろ。俺はおまえ知ってつけど、そんなとき、俺は大師でてめえはただの信徒だよ。それから15年経った今な、そんなに偉そうなのかよおまえは。他人を苦しめながら自分の今までのやり方を貫いて、そんな偉そうな大聖者になっちゃったのかよ！」

このように、時には師の方の人格についてまで言及されるなど、話は数時間に及びました。しかし、大阪道場としては、2年前に教団業務を離れて以来、まだワークに復帰されていないマイトレーヤ正大師の道場での活動を勝手に認めることなどできません。そのようなことはシッダサマージャで話し合うなどして、最終的には正悟師会議の場で決めていただくことだと思います。

大阪道場では、2年前にマイトレーヤ正大師が修行に入られてからは、教団全体の方針に沿って、それまでの信徒教化のあり方を見直してきました。ですから、2年前に一旦否定された「改革」路線を再び提唱されているマイトレーヤ正大師の考え方をそのまま受け入れることはできま

せん。それはあまりにも無責任ですし、わたしたちを信じて付いてきてくれている信徒に対する裏切りでもあります。

そのような理由によって、最終的に、マイトレーヤ正大師の勉強会開催については、大阪道場としては到底お受けできないことをサマンタバドラ師がはっきりと伝えしたのです。

そして、これを受けて、大家さん側は、11月中の道場撤退を通告し、そのままマイトレーヤ正大師を含むM派の師・サマナ10名ほどが、大阪道場の一角を占拠しはじめたのです（道場内での盗聴行為の発覚によって、1週間ほど前から光音天で修行に入っていたM派の上〇さんも、勝手に修行を抜け出し、大阪に戻ってきました）。その翌日には、大阪だけでなく京都、名古屋等からも信徒を呼び寄せ、「大阪道場の問題を説明する」として、早速、M派の勉強会が大阪道場を使って行なわれました。そして、それ以降、4階の道場は、事実上M派の人の活動拠点になっています。

また、マイトレーヤ正大師は、大家さんと話を付けて建物の「管理人」となり、今ではM派の人たちが建物の使用について大阪道場側に指図しはじめています（タントラウッピリー師が「副管理人」。マイトレーヤ正大師は、ジェーンティー師がタントラウッピリー師の関与を容認したかのように言っているようですが、これは事実ではありません。実は、タントラウッピリー師については、すでに13日の時点で、なぜか大家さんの代理人の口から、新たな契約人候補として、その名前が出ていました）。M派のある師の人は、「大阪道場の人間はすぐに出て行け！」と叫んだり、道場側の信徒対応に関する思い違いから、女性サマナ部屋にもものすごい勢いで怒鳴り込んできて、鍵の掛かったドアを力任せに押し破ったり、その言動には目に余るものがありました。

マイトレーヤ正大師はわたしたちに対して、大家さんの気持ちを考えろと繰り返し言われます。もちろん、わたしたちとしても、これまで体を張って道場を支えてくださった大家さんや奥様をはじめとする方々への恩をないがしろにし、敵対するつもりは毛頭ありません。これまでのことや今後のことについて、大家さんとじっくり話し合うことは当然必要なことだと考えていますし、それを望んでいます。

しかし、M派の人たちが自分たちの主張を通すための交渉・アピールの機会として、大家さんとの間の問題を利用しようとすることは到底受け入れられません。とにかく、池〇さんのメールから始まって、マイトレーヤ正大師の道場に乗り込んでの言動に至るまで、やり方がすべてあまりにも強引なのです。そういうことをされるから、今回のようなとても複雑な問題が生じてしまっているように、わたしには見えます。

大阪は、M派の人たちが道場を拠点化しはじめてから、事実上、信徒が来道できない状態になってしまっています。M派の人は、どこからか大阪の信徒リストを調達して一斉に電話かけを始め、電話に出ようとしない信徒に対してはM派ブログのプリントアウトを持参して宅訪し、盛んにアプローチを行なっています。多くの信徒が、突然始まったM派の人たちの活動に不安を抱いています。10月17日にマイトレーヤ正大師の一行が烏山に戻ってからも、タントラウッピリー師、仙台のパダーナさん、タントラロカ聖準師、光音天／烏山を飛び出していった渡●●●子さん、上〇さんらがそのまま大阪に残り、18日からは岐阜のマドウラ師も加わって活動を続けています。このままでは、多くの信徒がますます道場から遠のいていくでしょうし、わたしたちもM派のアプローチにさらされるような場所に信徒を呼ぶことなどできません。平穏な修行の場を早く信徒の人たちに返してあげたいです。M派の人たちには、グルから与えられた神聖な空間を、これ以上踏みこむようなことは、どうかもうやめていただきたいと思っています。

⇒ 151号 6p-ジハ
フブク

宮利より、by 平田 悟 H19. 9/2

①

◎あたり前の落とし穴について

私達は作業が終了すると洗面があります。タオルはタオル掛けにかかっており、係の人が1人ずつ手渡して渡してくれています。以前は各自が勝手にタオルを取っていましたのでごく混んでいました。ところが数年前から係の人が手渡して渡してくれるようになり、スムーズに流れるようになりました。このサービスが始まった時は、工場の人たちが係の人に感謝していました。

今から数ヶ月前のことです。私は他人のタオルを係の人から手渡されました。それに全く気付かずに使っていると本人から、「平田さん、タオルが違っていますか」等と尋ねられました。洗面は1分間と時間が決まっており、バタバタしている時に突然 虚を付かれたようになり、すごくあわてました。平常心を失った私は係の人に「〇〇さん、しっかりしてください」等と、みんなに聞こえるように批判しました。係の人は「~~はい~~いません」等と謝ってくれたので、何事もなく流れました。

すると、いっちはあまり口を挟まない担当職員が、「手渡しはもう止めようか」等と云われました。私は自分に對するメッセージかたと思いい、このことをよく考えてみようと心に留めました。

舍屋に帰ってよく考えてみると、これまではあたり前のように手渡しをしていくだけだったけれども、初めは自ら取っていたことを思い出しました。当時は作業で疲れた状態でタオルを探していたのでごく大変でした。それに混雑するごみシの居所が悪いとイライラしました。

②

しかし、それを改善してくれたのが、係の人の手渡しでした。最初はすごく感謝していましたが、慣れてしまってそれがあたり前になってしまったのです。

それに係の人が間違っても私が確認していれば未然に防げたはずでした。それなのに、私は係の人に責任を転嫁してしまったのです。そのことが気付いて、すごく反省しました。

私は普通に生活していて、時々、このあたり前の落とし穴にはまっています。本当はありがたいことなのに、何年もしてもらっていると、そのありがたさを忘れてしまいます。そして、そのサービスが失われた時に、それが大変ありがたいことだったと気付いて後悔します。

そのようにならないためには、あたり前をなくすることが大切ではないかと思います。そして、何かしてもらった時は、素直にありがとつと云い、心からそのように思うことが大切です。そうすれば、あたり前はなくなるのではないかと思います。

(3)



波野村 1996.8.27. 夏森/丹

「蜘蛛の子が散っていく様子は

一度だけ見たことがある」

オウム真理教（の一部のアーレフ）から、「正悟師」の地位にあった杉浦兄弟が脱会したのこと、まず間違いなさそうです。

――
>オウム真理教から杉浦茂（４９）、杉浦実（４５）の両最高幹部が脱会
>７月８日と２２日付。

>現体制の方針に反発して脱会したとみられて

>新教団を設立した上祐史浩元代表（４４）らに合流する動きはなさそう

――
毎日新聞も確認ということは、公安が認めた、つまり本人も公安に認めたということでしょう。このことは、アーレフ代表の野田ブログにも出ている。不思議な事態です。そして、杉浦メッセージが信者さんに流れているのも不思議な話。

だが、杉浦兄弟が、麻原さんへの帰依、憧れ、また裏腹の恐怖などを抜け出したかどうかは不明。だから一人オウムの場合も含めて、上祐派と合流したり、別の「分裂」に過ぎない可能性も残していよう。

まあ、何しても、２００６年を過ぎた今年はそんな年。

麻原さんの映画はとっく終わっているのだから。

残るは腐敗と近親憎悪なのだから、

ああ、杉浦兄弟さんも、それから前から言っているが上祐さん。それから、野田君、何故か頑張っている師の何人かの人

映画「生きる」あたり、見てね。３００円くらいで借りれるよ。

――
最後の地獄は、二宮君や松本家ではないか、と不安。

それにしても、「自と他の区別」云々なぞ、自分も他人も機械も岩石も地球も、そして宇宙も「自然」の一部。死ねばまあ原子、風になって、他の人や岩石、空気の一部に戻るのだから、というか生命体として日々原子を入れ替えているのだから、そもそも意味のないことなんだ、ということを、改めていうようになったのですね。

で一方、それをやたら強調し、自己それぞれの責任を放棄し、「善と悪」を相対化して責任を曖昧にしたがるのが、まあ戦後の戦前回帰権力者が言い出した一億総懺悔理論であり、「ひかりの輪」なのでして、注意が必要。

<http://www.cnet-sc.ne.jp/canarium/>